株式会社 タヤ

取材：2022年11月

会社のDNAを未来へと伝えることをサポートした知財への取り組み

**アパレル向けディスプレイハンガーにおいて65年の経験と実績があり
さまざまなニーズに応える製品を企画･開発･製造･販売。
オリジナルの累計300種類もの機能性ハンガーを世の中に送り出し、
ファッション業界をはじめとする多くの人々に喜ばれている。
金属の線材からは多様な形状への加工が可能であり、
新たな仕組みのハンガーを常に考案し、市場に問い続けている。**

主な権利

2006年：特　許　第3878961号
2022年：特　許　第7112826号
2017年：意匠登録 第1576310号
2019年：意匠登録 第1627983号
2015年：商標登録 第5782472号

会社概要

所在地：東京都葛飾区東新小岩 8-11-5
電　話：03-3693-4155
ＵＲＬ：https://e-taya.co.jp
業　種：ハンガー・ディスプレイ商品の企画・製造・販売
設　立：1970年（昭和45年）　資本金：1,000万円

代表取締役社長　杉田 潔さん

中国の模倣品が積まれたコンテナを門司港で止める

渋谷と言えば109と言われたほど、若者文化の聖地として知られ親しまれてきた、現・SHIBUYA109。話題となった90年代後半、新たなファッションを発信する服を支えてきたハンガーがある。株式会社タヤの作り出すスチール製ハンガーだ。1957年の創業以来、スチール製ハンガー専門メーカーとして独自のポジションを築いてきた。服の歴史とともに歩みながら進化し、多様なデザイン、美しさや機能性を追求してきたタヤのハンガー。長い歳月にわたって、特に徹底的な美感を要求されるアパレル業界から厚い信頼を寄せられている。

そんな同社では1950年代の創業当時から、特許権・実用新案権・意匠権取得に力を入れてきた。一方、世の中では安価な中国製品が市場に押し寄せてくるようになり、同社の模倣品も出回り始めていた。そこで、意匠権を税関に登録して、中国から運ばれてきたコンテナを港で止めたこともあったと杉田發雄２代目社長（現会長）は語る。「類似と思われるようなハンガーが入ったので門司港に確認しに来てほしいと連絡をもらったことがありました。しかしその時は、その模倣品がまだ利益を上げていなかったため損害賠償の対象にならないと言われ、こちらは弁護士も連れて行くとなると経費倒れになるので結局摘発はしませんでした。おかしなことだと思いましたよ」

また、別件では裁判まで行ったこともあり、知財権侵害は許さないという姿勢を当初より社外に示していた。

知財について学んだことを継続実践していくことが大切

知財センターを活用するようになったのは、外国特許出願費用の助成金の相談が最初で、10年ほど前のことだという。發雄会長はこう語る。「現在は、知財でいかに守るか、創意工夫を社内でどのように整理してみんなでしっかり知財を共有して行くかについて、知財センターのアドバイザーに助言をもらっています」

５年ほど前には、特許出願に関して拒絶理由通知が届き、その対応について知財センターに相談を続けていくうちに、ニッチトップ育成支援を紹介された。

「それまでは知財関係の書類の整理もままならないほどでしたが、ニッチトップ育成支援を受けてから社内全体の知財意識が高まりました」と發雄会長。杉田潔社長は「社員が知財の考え方や活用のしかたを学び、検索できるようになるなど一定の成果を得ましたが、今後は学んだことを継続実践していくことが大切だと感じます」と語る。

製品のブランド化のためにも知財とのセットで取り組む

發雄会長はこうも語った。「成果についてはこれからが正念場。今までは特許というと国内中心でしたが、今後は中国製品との違いをはっきりさせるなど、国際的な観点からも他社との差別化を明確にしたいです。タヤ製品であるというブランド化を図ることも大事だと思っています」

スマートハンガーと呼ばれる、シンプルなフォルムが美しいハンガー。衣服の掛けやすさや滑り落ちにくさなどの機能性も追求している。

衣料が落ちようとする力をクリップが閉まる力へ変換し、落ちようとした時にだけ掴む力が増すクリップをさらに改良したアイデアでも特許を取得。接着剤を使わずに、はめ込み式で樹脂をクリップに脱着できるため、分別が可能でSDGsの視点からも画期的なものである。

衣服をさりげなく引き立てるタヤのハンガー。美しさと機能性が両立している。

顧客の要望に応えられるように国内屈指の製造能力を備えた東京工場では、同社のほとんどのスチール製品を企画・製造。多種多様なハンガーを1日最大5,000本以上出荷している。

ニッチトップ育成支援を受けることで思わぬメリットもあったと言う發雄会長。「知財センターにアドバイスをもらうようになった頃から、ちょうど会社としての事業継承という大きなテーマが生じました。2021年４月に現社長に引き継ぎましたが、いろいろと難しいものです。会社は変わらないと発展して行きませんが、意見の食い違いも大きかったです。そうしたタイミングで、ともすると散発的な出願であった取り組みから知財戦略整備に移行しましたから、事業継承の支援にもなったと感じます。知財戦略の整備が、事業継承の過程の一部だったという気がしています」

知財戦略を整備することが事業継承のサポートになった

ニッチトップ育成支援を受けることで思わぬメリットもあったと言う發雄会長。「知財センターにアドバイスをもらうようになった頃から、ちょうど会社としての事業継承という大きなテーマが生じました。2021年４月に現社長に引き継ぎましたが、いろいろと難しいものです。会社は変わらないと発展して行きませんが、意見の食い違いも大きかったです。そうしたタイミングで、ともすると散発的な出願であった取り組みから知財戦略整備に移行しましたから、事業継承の支援にもなったと感じます。知財戦略の整備が、事業継承の過程の一部だったという気がしています」

嘘をつかず真摯に向き合い挑戦を続けるタヤのDNA

昔は商社との取引が100％だったが、最近はかなり変化してきている。潔社長は「2010年代以降、商社経由に限らずアパレルの会社と直接取引するようになりました。お店で困っていることや要望をダイレクトに聞き、それに対して製品を開発するという流れもできました。考えて形にして売るという、すべてを自社で一気通貫でできることが当社の強み。社員はそこに楽しみを感じてくれていると思います」と楽しそうに語る。

最後に、お二方に普段から大切にしている信条について尋ねると、發雄会長は「嘘をつかない」…ごまかさずに正々堂々として誠実であること、そして潔社長は「できないと言わない」…あきらめずに粘り強く挑戦していくことだと語られた。人に対して、仕事に対して、常に真摯に向き合っていきたいという、タヤのDNAが強く感じられた。

知財センターから

製品に対する確固たる自信が自社の権利意識へ

アパレル向けハンガーはデザインと製品の仕上がりが命であるため、常に創意工夫とともに新しい技術を生み、数多くの意匠登録を行ってきました。製品への確固たる自信を持っているため、お客様によっては縁の下で支える仕事という側面を持ちつつも、タヤ製ハンガーのブランド化をいかに実現するかが課題だと思います。　担当：阿部隆夫アドバイザー